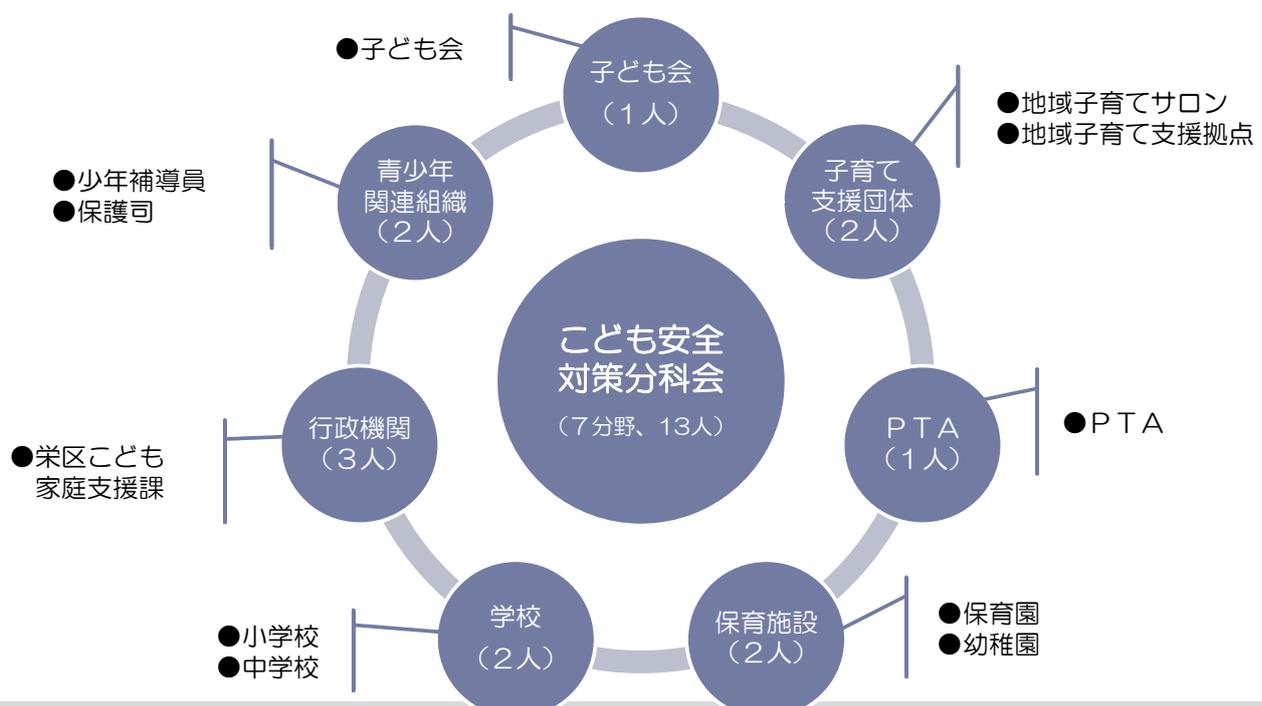


横浜市栄区セーフコミュニティ分野別分科会
こども安全対策分科会

座長 片岡 喜久江



こども安全対策分科会の構成

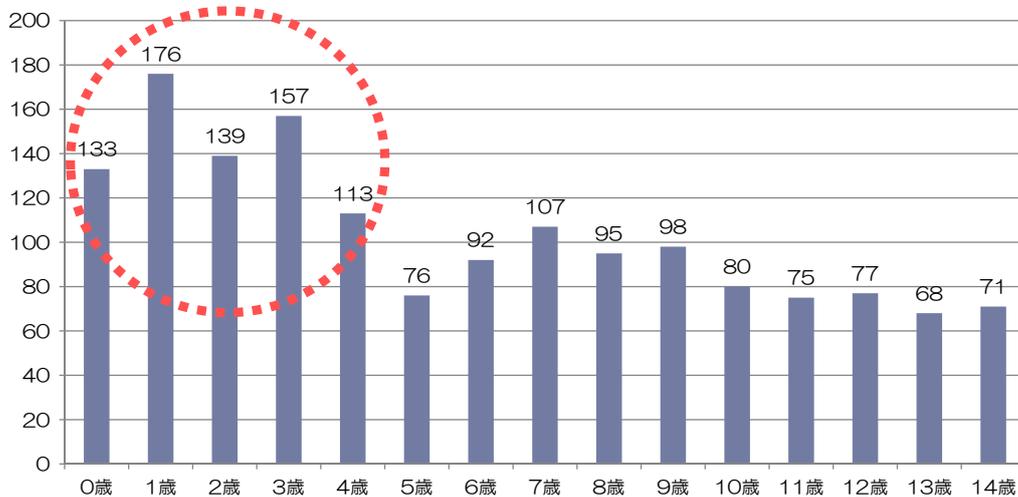


図表1 こども安全対策分科会の構成

分科会設立の背景

～子どものけがの発生状況（年齢別）～

□ 0歳～14歳のこどもの救急搬送件数をみると、小学校入学前のこどものけがの件数が多い



図表2 子どもけがの発生状況（年齢別）
（出典：救急搬送データ 2007～2016）



課題設定の背景

～乳幼児の受傷経験とその傾向（1）～

□ 乳幼児健診でのアンケートから、乳幼児の親の多くは、多岐に渡る子どもの傷害（ヒヤリハット含む）を経験している

図表3 乳幼児の親が経験したヒヤリハットの割合

受傷原因	4か月児 母親(N=133)	1歳6か月児 母親(n=129)
転倒	11.3%	53.5%
転落	12.0%	45.0%
誤飲・窒息	6.0%	24.8%
熱傷	2.3%	11.6%
溺水	3.8%	12.4%



大人が注意して対策をとってれば、未然に防ぐことができる事故も多い



養育者へ事故予防の知識を啓発する



出典：SC傷害サーベイランスに関する調査研究報告書（2013年）

<乳幼児健診（健康診査）とは>

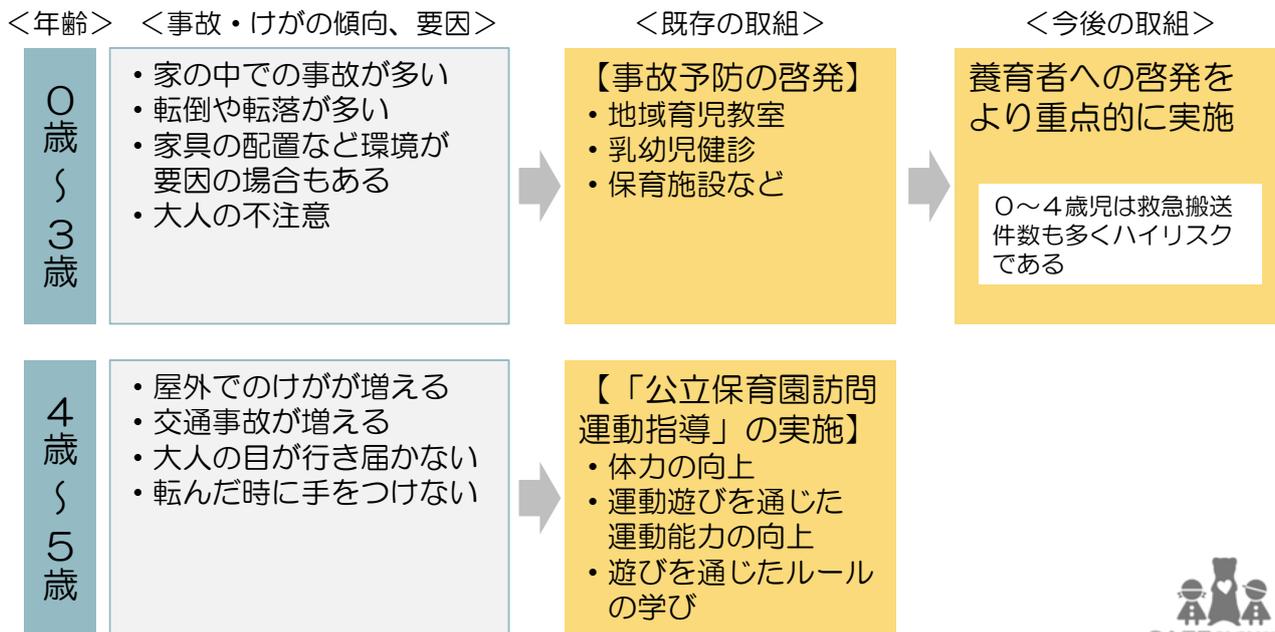
母子保健法で、4か月・1歳6か月・3歳児を対象に行政機関による実施が義務づけられている。

医師、保健師、歯科衛生士などの専門職が、子どもの発育や発達を成長の節目で確認し、必要に応じて専門機関の紹介や相談・家庭訪問などの支援を行う。

栄区における受診率は、横浜市全域平均と同じ約95%である。

課題設定の背景

～乳幼児の受傷経験とその傾向（2）～



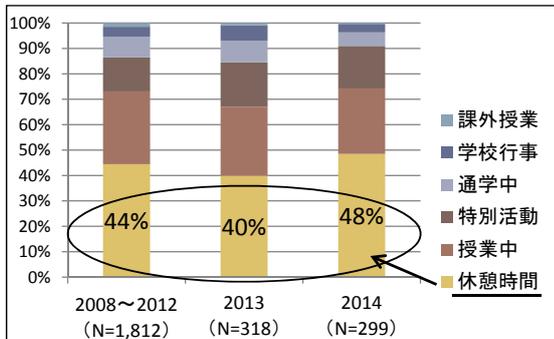
課題設定の背景

～小学生の事故発生の特徴（1）～

□ 小学校内で起きた事故（けが）の発生時間帯を分析すると、「休憩時間」に多く発生している

⇒「休憩時間」は **大人の目が行き届かない**

図表4 小学校内で起きた事故の発生時間帯（栄区14小学校）



出典：独立行政法人日本スポーツ振興センター「小中災害共済給付データ」

子どもが自ら危険を予知して、回避する能力が欠如している

図表5 この1年間にけがをして病院に行ったことがある割合

この1年間にけがをして病院に行ったことはあるか？		
「ある」と回答 35.0%		
＜けがをした時の状態＞		
注意が足りなかった	27.6%	←不注意への認識あり
慌てていた	23.9%	
特にない	21.6%	←危険に対する無知

出典：2016年度栄区学校アンケート (N=246)

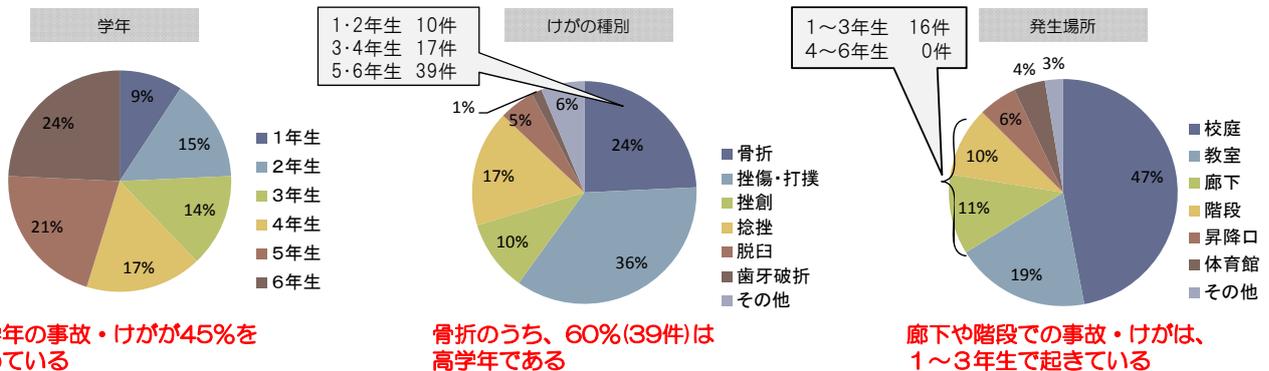
必要！

⇒ **KYT（危険予知トレーニング）で危険回避の意識を高める**

課題設定の背景

～小学生の事故発生の特徴（2）～

図表6 「休憩時間」に発生した事故データの分析（出典：小中災害共済給付データ 2013～2014 N=272）



<要因>
体も大きくなり、動きが激しくなることで、大きなけがにつながる

<要因>
狭い空間で、自分の動きと周囲の状況を予測できない

低学年のうちに、危険回避の体験や意識を高めることで、将来的に発生する事故を未然に防ぐことが必要である。



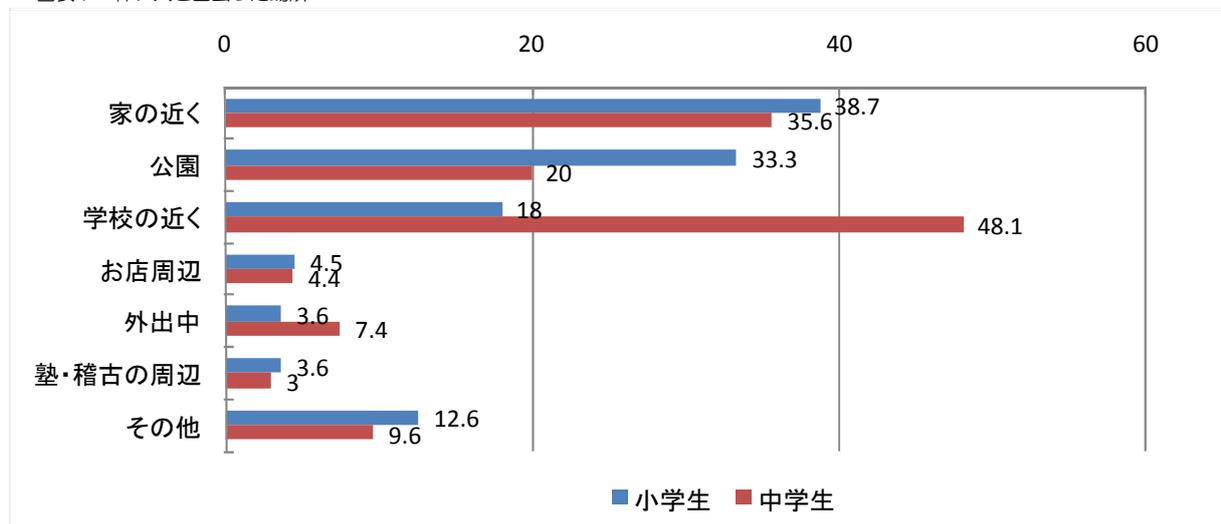
小学1～3年生の利用が多い放課後を過ごす施設で、KYT（危険予知トレーニング）を実施する。

課題設定の背景

～小中学生の不審者に関するアンケート結果（1）～

□ 1年間に怖い人と出会った割合は小学生で30%、中学生で40%にのぼり、場所は家の近くや公園、学校の近くが大半を占めている

図表7 怖い人と出会った場所



課題設定の背景

～小中学生の不審者に関するアンケート結果（２）～

- 怖い人と出会った時の対応は、走って逃げた、何もしなかった割合が高く、積極的に行動した子どもは少ない

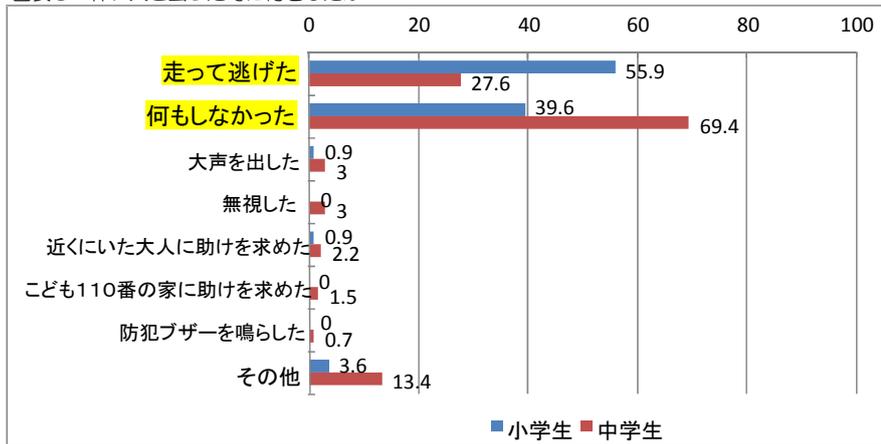


必要！

臨機応変に対応できない子どもが多い

⇒ 周囲の見守りが不可欠である

図表8 怖い人と会った時に何をしたか



出典：2011年傷害サーベイランス分科会調べ（N=小学生111 中学生134）

課題と対策

課題①

スライド3～5より

＜乳幼児＞

- ・0～4歳の救急搬送件数が多い
- ・養育者のヒヤリハット経験が多い

取組①

養育者への啓発

課題②

スライド6～7より

＜小学生＞

小学校内で起きた事故は、大人の目が行き届かない「休憩時間」に発生することが多い

取組②

子どもへの注意喚起
（KYTの実施）

課題③

スライド8～9より

＜小中学生＞

「怖い人と出会う」のは家や学校の周辺である

取組③

地域の住民による見守り



課題に対する取組の概要（1）

図表10 課題に対する取組の概要①

		国レベル	県・市・区	地域レベル
課題① <乳幼児> 0～4歳までの救急搬送件数が多い	環境改善	施設・設備の改善		
	規則・罰則	教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン		
	教育・啓発	「健やか親子21」パンフレット配布	事故予防パンフレット配布 SC 事故予防チェックリストの配布	SC 事故予防クリアファイル・リーフレットの配布 SC 保健師によるアドバイス
課題② <小学生> 大人の目が行き届かない「休憩時間」に事故が多い	環境改善	施設・設備の改善		
	規則・罰則	学校事故対応に関する指針		
	教育・啓発			SC 子ども会におけるKYT SC 放課後施設におけるKYT

課題に対する取組の概要（2）

図表11 課題に対する取組の概要②

		国レベル	県・市・区	地域レベル
課題③ <小中学生> 「怖い人と出会う」のは家や学校の周辺である	環境改善	施設・設備の改善		
	規則・罰則	学校の危機管理マニュアル～子どもを犯罪から守るために～		
	教育・啓発	子ども110番の家マニュアルの公開 子ども防犯テキストマニュアルの公開	防犯教室（学校・警察・地域） 子ども安全紙芝居	SC 登下校の見守り SC こども110番の家



COMMUNITY

認証取得後からの重点取組の変遷

- 2014年の重点取組の追加時に、救急搬送の多い乳幼児への取組として養育者への啓発を追加した。

図表12 認証取得後からの重点取組の変遷

認証取得時 (2013年)	重点取組の追加 (2014年)	指標の見直し (2016年)
訪問運動指導	訪問運動指導	
KYT (危険予知トレーニング)	KYT (危険予知トレーニング)	KYT (危険予知トレーニング)
地域住民による見守り こども110番の家	地域住民による見守り こども110番の家	地域住民による見守り こども110番の家
	養育者への啓発	養育者への啓発

取組① 養育者への啓発

救急搬送が多い4歳以下の子どもの養育者に向けて、子どもの事故の危険性を理解し、予防してもらうための啓発を行い、救急搬送件数の減少を目指します。

- 保育施設や地域子育て支援拠点等での事故予防クリアファイルやリーフレットの配布（写真1）
- 地域育児教室（赤ちゃん会）での保健師によるワンポイントアドバイス（写真2）
- 乳幼児健診での事故予防チェックリストの配布



図表13 地域子育て支援拠点でクリアファイルを配布しながら養育者へ事故予防の啓発を行っている様子



図表14 赤ちゃん会の様子



<アプローチの手法>

取組① 養育者への啓発

図表15 取組①の評価方法

短期的指標	中期的指標	長期的指標
<p>養育者が事故発生の危険性を知る</p> <hr/> <p>①啓発リーフレット等の配布数 ②地域育児教室(赤ちゃん会)の参加者数(実数)</p>	<p>事故予防の対策を実施している</p> <hr/> <p>実際に「対策を行っている」人の割合 (乳幼児健診受診対象者の養育者アンケート集計)</p>	<p>乳幼児(特に0~4歳)の事故が減少する</p> <hr/> <p>乳幼児の事故による救急搬送件数データ (救急搬送データ集計)</p>



取組① プログラムの評価（短期的指標）

- 保育施設や地域子育て支援拠点等でのクリアファイルの配布、生後4か月までの赤ちゃんがいる家庭へのリーフレットの配布、地域育児教室での啓発などにより、養育者が事故発生の危険性を知る機会は増えている

図表16 取組① プログラムの評価（短期的指標）

		2013	2014	2015	2016	2017
①配布数	クリアファイル	—	—	1,480部	710部	785部
	リーフレット ※全ての家庭へ配布	—	—	400部	821部	814部
	栄区の出生数 (参考)	957人	874人	864人	821人	814人
②地域育児教室 (赤ちゃん会)の参加者数		—	—	375人	321人	306人

取組① プログラムの評価（中期的指標）

- 乳幼児健診でのアンケートで、事故予防の対策方法を「知っている」人、「実際に対策を行っている」人の割合を集計し、リーフレット配布や地域育児教室での知識が実践されているかを確認する

図表17 取組① プログラムの評価（中期的指標） 4か月児

<4か月児 養育者>	2013	2014	2015 (N = 166)	2016 (N = 146)	2017 (N = 84)
事故予防の対策方法を「知っている」人の割合	—	—	94.6 %	94.1 %	92.9 %
「実際に対策を行っている」人の割合	—	—	65.7 %	64.3 %	61.1 %

4か月健診時に啓発した効果により、その後の1年間で「養育者の意識」が高まっている

up

図表18 取組① プログラムの評価（中期的指標） 1歳6か月児

<1歳6か月児 養育者>	2013	2014	2015 (N = 189)	2016 (N = 155)	2017 (N = 95)
事故予防の対策方法を「知っている」人の割合	—	—	95.8 %	95.4 %	95.5 %
「実際に対策を行っている」人の割合	—	—	75.5 %	76.7 %	76.6 %

取組① プログラムの評価（中期的指標）

□ 子どもの事故予防に関するアンケート（乳幼児健診時 養育者アンケート）の分析

アンケートの15項目のうち、重篤な事故につながる危険がある項目について、対策方法を知っているが、「実際に行っている」と回答した割合が低い項目がありました。

< 4か月児 >	知っている	「対策を行っている」	< 1歳6か月児 >	知っている	「対策を行っている」
赤ちゃんが寝ている周囲にタオルやぬいぐるみなどは置かない	94%	74%	炊飯器やポットなどは手の届かないところに置いている	98%	76%
洗面所や浴室では、洗剤や石鹸などは高い位置に置いている(戸棚に入れてロック)	91%	58%	ブラインドやカーテンのひもは高い位置で束ねておく	84%	63%
赤ちゃんを抱っこやおんぶしたままで、調理をしない	81%	50%	洗面台や洗濯機の周辺に踏み台になるような物を置かない(洗濯かごやバケツなど)	80%	53%

図表19 取組① プログラムの評価（中期的指標 4か月児）

図表20 取組① プログラムの評価（中期的指標 1歳6か月児）

「対策を行っている」人の数値を高めていけるように、養育者へ重点的な啓発を図る → 事故予防の実効性を高めていく

取組① プログラムの評価（長期的指標）

□ 0～4歳児の救急搬送件数の減少を目指す

図表21 取組① プログラムの評価（長期的指標）

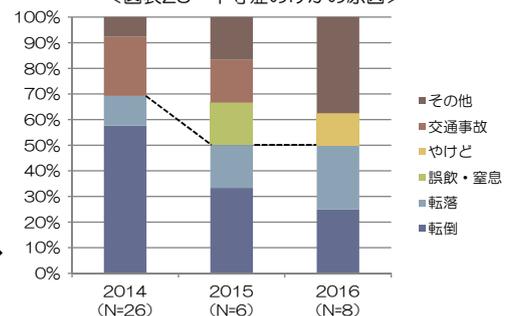
	2013	2014	2015	2016	2017
0～4歳児の救急搬送件数	65件 (0～4歳のうち 1.30%)	79件 (0～4歳のうち 1.60%)	56件 (0～4歳のうち 1.17%)	62件 (0～4歳のうち 1.41%)	77件 (0～4歳のうち 1.82%)
※参考データ (栄区 0～4歳児の人数： 各年1月1日現在)	(5,004人)	(4,948人)	(4,775人)	(4,389人)	(4,221人)

図表22 症状の程度
入院を要するような中等症のけがの割合が減少している

症状の程度			
	2014年	2015年	2016年
軽症	67.1%(53件)	89.3%(50件)	87.1%(54件)
中等症	32.9%(26件)	10.7%(6件)	12.9%(8件)

※中等症：生命の危険はないが入院を要するもの

図表23 中等症のけがの原因>



出典：救急搬送データ（2014～2016）

取組② 子どもへの注意喚起

■KYT（危険予知トレーニング）とは

KYTは、危険のK、予知のY、訓練、トレーニングのTを取った「危険予知トレーニング」の略称です。英語では、Hazard prediction training になります。

元々は、製造業などの生産ラインにおいて、労働災害を防止するために行われていた方法で、イラストを見て、潜んでいる危険について、少人数で話し合うものです。

■広がり

産業界での内容を参考に、これまで全国の子ども会で推奨、実施されており、栄区の子ども会においても、以前から活動の前などに実施しています。

21

取組② 子どもへの注意喚起

■子ども会でのKYT（危険予知トレーニング）

区内の子ども会では、予想される危険を話し合い、危険察知能力を向上させる危険予知トレーニングを行っています。子どもたち自身が危険に対する意識を持ち、日頃から身の周りの危険に気づいて防げるようになることを目指しています。



図表24 KYTの様子

22

取組② 子どもへの注意喚起

■子ども会からの広がり①

分科会の委員たちが、お互いの活動の情報共有を図る目的もあり、KYT講習会を体験し、その必要性を学びました。

そして、それぞれが所属している団体の取組においても、様々な場面でKYTを活用していきたいとの意見がでました。地域の活動に“事故のない安全な活動”への意識が高まっています。



図表25 KYT講習会①



図表26 KYT講習会②

23

取組② 子どもへの注意喚起

■子ども会からの広がり②

各小学校に設置されている放課後キッズクラブやはまっ子ふれあいスクールなどの放課後を過ごす施設のスタッフ研修会等で、KYT指導者育成講習会を実施しています。

各施設の活動の中で、子どもたちが危険予知トレーニングを行い、危険を回避する行動を学んでいます。

放課後キッズクラブ 11施設（登録児童数：2,512人）

はまっ子ふれあいスクール 3施設（登録児童数：788人）



図表27 KYTの広がり

栄区14小学校の在籍児童数の合計は、6,346人（2017年4月現在）であり、放課後を過ごす施設でKYTを実施することで、約50%の児童が、特に低学年においては約85%の児童が学ぶ機会を得ます。

今後、高学年へのアプローチを視野に入れて取り組んでいきます。



24

<アプローチの手法>

取組② 子どもへの注意喚起

図表28 取組②の評価方法

短期的指標	中期的指標	長期的指標
周囲の大人が日常生活に潜む危険性を認識する <hr/> KYT指導者育成講習会の参加者数	KYT（危険予知トレーニング）を実施する <hr/> ①トレーニング実施回数 ②トレーニング参加児童数	小学生の事故が減少する <hr/> ①小学校内で起きる事故のうち、「休憩時間」に発生した事故の割合（「小中災害共済給付データ」より） ②放課後を過ごす施設で発生した事故件数（「事故報告書」より）



取組② プログラムの評価（短期的指標）

- KYT指導者育成講習会を開催し、日常のどのような場面に危険が潜んでいるかを周囲の大人が認識する。今後は子ども会のみでなく、子どもたちが放課後を過ごす施設で実施し、参加者数の増加を図ることで、KYT（危険予知トレーニング）の実効性を確保する

図表29 取組② プログラムの評価（短期的指標）

	2013	2014	2015	2016	2017
KYT指導者育成講習会の参加者数	70人	80人	70人	50人	137人
（子ども会団体数）	45団体	42団体	35団体	39団体	39団体
（放課後施設数）	—	—	—	—	14施設

※2017年から、放課後施設スタッフ向けの講習を実施している。



取組② プログラムの評価（中期的指標）

- KYT（危険予知トレーニング）を行い、子ども自らが危険を判断する力や危険を回避する行動を身につける

図表30 取組② プログラムの評価（中期的指標）

	2013	2014	2015	2016	2017
①トレーニング実施回数 （子ども会、放課後施設）	2回	2回	2回	2回	38回
②トレーニング参加児童数 （子ども会、放課後施設）	170人	212人	100人	80人	731人

※2017年から、放課後施設においても実施している。



取組② プログラムの評価（長期的指標）

- 子どもが危険を回避する行動を身につけることで、事故の減少を目指す

図表31 取組② プログラムの評価（長期的指標）

	2013	2014	2015	2016	2017
①小学校内で起きた事故のうち、「休憩時間」に発生した事故の割合 （出典：小中災害共済給付データ）	127件 (39.9%)	145件 (48.5%)	91件 (38.2%)	100件 (41.5%)	2018年 10月頃集計
②放課後を過ごす施設で発生した事故の件数	—	20件	28件	39件	52件



取組③ 地域の住民による見守り

■登下校の見守り

見守り活動団体（学援隊等）や保護者・地域住民による登下校時の通学路の安全見守りを行うことで、子どもが「怖い人に出会った」と感じる回数の減少を目指します。

- 保護者、地域住民による登下校時の通学路の安全見守り



図表32 通学路の安全見守り①



図表33 通学路の安全見守り②



取組③ 地域の住民による見守り

■こども110番の家

P T Aや学校が啓発・情報提供を行い、不審者に出会ったり緊急事態が起きた時、逃げ込める場所として地域の民家や店舗が登録します。子どもたちの安全を見守るとともに、犯罪抑止力としての効果もあります。



図表34 こども110番の家



図表35 地域のイベントでブースを設けて登録への呼びかけを行っている様子



取組③ 地域の住民による見守り

～ 子どもたちと地域の大人たちとの顔の見える関係づくり ～

学校が子どもたちに呼びかけたり、子どもたちが自ら「あいさつ運動」や「地域イベント」に参加することによって、地域の大人たちと顔の見える関係を築き、安心して過ごせる環境づくりを目指します。

- あいさつ運動（各小学校や中学校、自治会等）
- 地域イベントへの参加（地域まつり、地域スポーツ大会、交流会等）



図表36 あいさつ運動



図表37 地域イベントへの参加

31

取組③ 地域の住民による見守り

～ 子どもたちを取り巻く新たな課題に向けて～

＜少年補導員によるサイバー教室の開催＞

携帯・スマホの普及により、子どもたちがSNS等を通じてトラブルや犯罪に巻き込まれる危険性が高まっています。小中学生を対象に、少年補導員が講師となって、サイバー教室や防犯教室で安全な使い方を教えたり、「ケータイ・スマホサミット」を開催し、子ども自らがインターネットやSNSの使い方を考える機会を提供しています。



図表38 サイバー教室

	小学5年生	中学2年生
個人で使用する通信機器を持っている	61 %	73 %
通信機器を1日3時間以上使っている	10 %	26 %
インターネット利用でトラブルにあったことがある	5 %	11 %

図表39 通信機器に関するデータ
(出典：2016年度米区学校アンケート N=474)



32

<アプローチの手法>

取組③ 地域の住民による見守り

図表40 取組③の評価方法

短期的指標	中期的指標	長期的指標
地域の住民が見守り活動を実施している	子どもと地域の大人との関係づくりができています	子どもが地域で安全安心に暮らしている
<ul style="list-style-type: none"> 見守り活動の参加者数 「こども110番の家」の登録者数 	地域で「あいさつをする」子どもの割合 (学校アンケート集計)	「安全安心な地域である」と感じている子どもの割合 (学校アンケート集計)



取組③ プログラムの評価 (短期的指標)

- 安全な環境づくりに対する地域の理解があり、見守り活動参加者数（学援隊等）や「こども110番の家」登録者数は、地域全体で安定的に維持している

図表41 取組③ プログラムの評価 (短期的指標)

	2013	2014	2015	2016	2017
①見守り活動参加者数 (学援隊等)	—	—	1,600 人	1,700 人	1,750 人
②「こども110番の家」登録者数	2,134 軒	2,213 軒	2,210 軒	2,376 軒	2,384 軒



取組③ プログラムの評価（中期的指標）

- 地域の見守り活動が活発になることで、その活動を子どもたちが知る機会も多くなり、地域に顔見知りの大人が増え、「あいさつをする」子どもの割合が増加することを目指す

図表42 取組③ プログラムの評価（中期的指標）

	2012	2013~2015	2016	2017
地域で「あいさつをする」 子どもの割合 (小学生)	94.0 %	—	97.6 %	98.0 %
地域で「あいさつをする」 子どもの割合 (中学生)	89.7 %	—	90.8 %	92.6 %

出典：2017年度栄区学校アンケート（N=547）



取組③ プログラムの評価（長期的指標）

- 子どもと地域との「顔の見える関係づくり」が進められ、子どもたちが安心して地域で暮らしている

図表43 取組③ プログラムの評価（長期的指標）

	2012	2013~2015	2016	2017
「安全安心な地域である」 と感じている子どもの割合 (小学生)	89.1 %	—	85.4 %	92.8 %
「安全安心な地域である」 と感じている子どもの割合 (中学生)	62.1 %	—	65.5 %	71.6 %

出典：2017年度栄区学校アンケート（N=546）



セーフコミュニティ活動による気づきや変化

- 「こどもの安全」という視点から、話し合いの場が活発になってきた。
- 課題に対する取組を進めるために、活動のネットワークが広がっている。
- 乳幼児の養育者への啓発については、事故予防の対策方法の認知度アンケートにおいて、赤ちゃんが寝ている周囲にタオルやぬいぐるみを置かないなど、「知っている」けれど「対策を行っていない」人も多い項目があることが分かった。



図表44 分科会でKYTを体験している様子



37

今後の方向性

- 乳幼児の養育者への啓発については、「知っている」けれど「対策を行っていない」項目に対して、どうしたら対策を行うことができるのかを検討していく必要がある。
- 今後も分科会を核にして、各委員のネットワークを生かしながら、多くの人とこどもの安全に関わる課題を共有し、取組の輪を広げる。
- データを活用しながら、セーフコミュニティの成果を地域のみなさんと共有し、取組に参加してくれる人を増やしていく。



38

ご清聴ありがとうございました

